

## 講演会（第 77 回例会）

### 演題：人間関係を深めるコミュニケーションの基礎

実施期日：令和元年 5 月 30 日（木）

会場：アオッサ 706, 707 号室：

講師：当会事務局次長 大野勉

参加者：99 名（内新会員 6 名）

進行担当の安本さんが、講師としての私（今回は講師・記録者が同一人という特殊な例の為、以後も“私”と表現しながら記録を綴らせて頂きたい）を簡単に紹介して話を始めた。

コミュニケーションの相手は主に、私が教育研究所相談課時代のクライアント（相談に見えた人）で、子どもとか大人、また、時代にはあまり関係ないと思うと断って話を進めた。

**話の内容：**子どもの自立はホップ（しっかり抱いて）・ステップ（下におろして）・ジャンプ（一人にして）の過程を経る。いわば、根を養えば大樹は自ずから育つ、と言える。乳児としての約半年間は、「お腹がすいた」とか、「オムツを代えてよ」とか「淋しいよ」とか言っては泣き、その都度誰かが走り寄って来て自分の欲求を満たしてくれることに安心し、無意識のうちに「自分を守ってくれる人が身近にいる」ことを実感し、3ヶ月頃には“3ヶ月微笑（虫笑い）”、7か月位経つと”7か月不安（人見知り）の症状を見せる。これらの症状は、その子は順調に育っている証と言える。その後次第に自我が芽生え、3~4歳になると物を収めた籠をひっくり返したり、障子を破ったり、親の言うことに反抗したりする、いわゆる第一反抗期を迎える。籠をひっくり返したり、障子を破ったりするのは親からみれば困ったいたずらに映るが、籠の中には何があるか、障子の向こうには何があるかを知りたい探求心が芽生えているのであり、親には反抗と映る口ごたえは、自我の芽生えと理解すべきである。

このように順調に育っていくと、小学校5年頃には親の指図に口を尖らせて逆らう「口ごたえ期」、「14歳は厄年」ともいえる中学二年には大きな反抗期：第二反抗期を迎え、自我の高まりを伴って大きく成長するのである。なお、中学生の頃は「大きな子ども」「小さな大人」（marginal man：周辺人）として周囲からは大人扱いされたり、子ども扱いされたりするが、昔の元服に倣って一人前の大人として扱ったほうが良いと思う。

男性は元来厳しく、逞しく、理性的な一面を持っているのとは対照的に、女性は優しく、温かく、情緒的な一面を持っている。しかしこの男性的な一面（男性性）は女性にも備わっているし、逆に女性らしさ（女性性）は男性にもある。片親は子どもに対してこの二つの性を使い分けねばならないところに子育ての難しさがあるが、両親が協力して子育てに当たる場合は夫婦の対応は一致したものでなければならない。

私が勧めたい対応は

- (1) 傾聴：聴は字の示す通り、耳プラス (+) 目と心を駆使して聞くべきもの
- (2) 受容と共感：相手の言うことをありのままに受け入れ、相手を感じずるまま感ずること  
とで、聞き手の見解や価値観を入れずに聞くことである。
- (3) 直そうとするな、分かろうとせよ：親が困った子どもの問題を親は直そう直そうとするが、子どもややりたい気持ちを理解してやることが大切。
- (4) 「私は…で始める会話」：「お前は…」で会話を始めると相手を非難するが多いが、「お母さんはそんな言葉は好きじゃないな」のように「私は…」で始まる会話にすれば親の気持ちを伝えることで、相手を非難することなく自分の気持ちを伝えられる。
- (5) I am OK. You are OK. こう言えるには先ず自分が自分を好きになることが肝要。
- (6) 人間は徹底的に主体的な存在であることを知るべき
- (7) 人を動かす秘訣はただ一つ「動きたくなる気持ちを起こさせること」
- (8) 人間の欲求の中で一番強いのは認められたいことであることを知ること

#### これまでの体験を通じて強く感じること

・ 家庭教育の基本は、内在する子供の能力を引き出してやること、自分で考え、自分で行動し、自分で責任の取れる子どもに育てることであることを親は知るべきであると同時に、家庭は厳しいしつけの場であり、会話と笑いのある、暖かく安らぎの場ではなくてはならない。

・ 人は誉められ認められると達成感、成就感が得られ、それが自信につながり、良い自己概念に結びつくものだ。逆に失敗したときに「どうしてこんなことができないの」「何回言えば分かるの」「嫌々するから失敗するのよ」などと叱ったり注意したりすると、失敗したことを悔い、自信を失い、ひいては劣等感につながってしまう。自信を失わせる言葉は禁句と心得たい。

・ 親は人のものを盗んだり、友達をいじめたり、つまり反社会的な行動をした場合と人に迷惑をかけた場合は子どもを強く叱るべきである。ただし、愛に裏打ちされた叱責であるべきで、且つ、行った行為を叱るべきで、人格を傷つけるものであってはならない。

最後に**私に関わった子どもの口から実際に出た言葉**を紹介しておきます。

- \* 私の母は「ナサイ」ママ
- \* 僕が考えているのに、お母さんが先に答えを出してしまう
- \* 母ちゃんの無言の叫びが聞こえてくる
- \* (夢の中で) 透明人間になって学校へ行ったが楽しくなかった
- \* 13分ならできるよ (どれだけだったら勉強できる?の問いに)
- \* ミリ単位なら行けるよ (不登校児にどれくらいの距離だったら学校へ行ける?の問いに)

以上 大野 記

